

中国人の76%が 「自国の歴史教科書は嘘」と感じている。

2013年8月、中国の大手ポータルサイト「網易」が、ネット上で、こんなアンケートを実施した。
〈日中どちらの歴史教科書を支持しますか？〉

日本の教科書が歴史を歪曲していると答えたのは2735人。
一方、中国の教科書が嘘だと回答した人が、8981人で、実に約76%の中国人が、自国の歴史教科書が嘘だと感じていることが分かったのだ。

文化大革命では数百万人が殺されているのに教科書には何も書いていない。教科書の内容が実生活と合わないことを、誰もが疑問を感じている。

中国の教科書は嘘と主張する人は、〈私たちは政府のフィクションを読んで育った〉
〈ねつ造能力というのは共産党が一番なんだよ〉など、政府に批判的な内容が多くみられる。

共産党に不信感を抱く若者が独自に歴史や世界の動向を知ろうとしても、中国国内には強力なネット規制があるため、海外の情報には触れられない。
漫画家の孫向文氏は、海外のサーバーを経由してウイキペディアや海外の記事などを見て、初めて尖閣諸島の本質を知ったという。

人民日報は1953年の時点で、「尖閣は日本の領土」と書いている。政府は最近になって「人民日報の記述は政府と関係ない」と言い訳している。人民日報は共産党の代弁をしていて嘘ばかりついています。

中国ではテレビやラジオが毎日のように、「今日、中国の船が釣魚島に行きました。中国領土に侵入する日本の船に警告しました」と、共産党の発表をうのみにして報道しています。
中国版ウイキペディアの「百度百科」には、釣魚島は中国が実効支配していると書いてある。
中国政府が情報コントロールをしている。

毛沢東時代の教科書には南京大虐殺などなく、日本軍の残虐行為を強調する場面もほとんどありません。
抗日戦争よりも、国民党との戦いの方が多くのページを費やしていた。

しかし、90年代にはいり、江沢民時代が始まると一変します。天安門事件の後、共産党は求心力を保つため、ナショナリズムを持ち出し、教科書は愛国主義一色に染まった。
江沢民が国民に教えた近代史のストーリーは、中華民族が日本を含めた西洋列強に侵略されて屈辱を味わう中、中国共産党がそれに敢然と反抗して民族の解放を実現した、というもの。
共産党こそ民族の英雄だという物語を強制的に教え込んだのです。
その中で最も強調されたのが、日本との戦いだ。

「日中戦争は8年間なのに、今の近現代史の教科書の四分の一程度は、日中戦争に関する記述です。一番の目玉は南京大虐殺。「死者30万」という誰も証明していない数字を持ち出して、日本人の残虐さをことさら強調している。
こうしたストーリーを教え込むことで、中国共産党は歴史的英雄ではなく、現在も‘復活した日本軍国主義’と戦う英雄どというイメージを作っている。
日本という外敵が限り、中国人民は共産党を必要とする。それで共産党の一党独裁が保てると考えている」

しかし、中国の若者は中国共産党の情報操作に気づいている。猛威を振るった反日デモのエネルギーが中国共産党そのものを揺るがす日は、そう遠くないのかもしれない。